

＊ ＊ 広町の森・植物だより ＊ ＊

15 春の野草・タンポポなど

2007年4月

鎌倉市七里ガ浜・角田紀之

- * 先に春の野の花の代表“スマレ”についてお話しました。今回は春の広町で目立つ草花のうち、食べられる＝食可となっているもの **3** 種、食べられない＝有毒となっているもの **3** 種です。写真をお楽しみいただきながらお読みください。私は専門家ではありませんので実際に研究・実験したわけではありません。どれもありふれたもので、山菜の図鑑などに載っています。

(1) タンポポ (カントウタンポポ) (キク科、多年草)



A



B



07年3月下旬 広町御所入口広場

(種類、繁殖)

- * 一頃タンポポ戦争なんていう記事が新聞に載ったことがありました。空き地や駐車場の端、道端などに元気よく生えているのは今ではほとんどセイヨウタンポポです。セイヨウタンポポは明治になって食用目的で導入され、のち野生化して全国的に増殖したとも言われます(帰化植物)。繁殖力が旺盛なので日本の在来種は圧迫され減ってしまったといえます。幸いにも広町のタンポポは在来種のカントウタンポポです。カンサイタンポポ、トウカイタンポポなどみな似ていますがいくつか種類があります。

- * 黄色い花びらの下側に受け皿のような緑の部分がありますが（上で右手の小さい写真 **A**、**B**）これは“総苞”（そうほう）とといいます。**A** はカントウタンポポで総苞は反り返っていません、**B** はセイヨウタンポポで総苞がそりかえっています（広町でなく近くの道端で撮ったもの）。これが区別のポイントとといいます。中には判別しにくいものもあります。もっとも最近の研究調査によれば実際には在来種と帰化種との自然交雑種が圧倒的に多いとのこと。自然は“自然的に”そしてまた“人為的に”変わっていきつつあるのですね。
- * なぜセイヨウ～は広がるのか。勿論日本の環境にあったことにもよるのでしょうが決定的な違いがあります。在来種のカントウ～は自分の雄シベの花粉を自分の雌シベにつけてもタネができない性質があります。これを「自家不和合性」といいます。ちょっと難しい言葉ですが植物ではすごく重要な点なのです。この理由は簡単にいうと、動物界に広くある近親婚のタブーと同じで、環境変化に強い多様な仲間を生み出すためであるなどいくつか説明されていますが完全にはわかっていません。それに対し帰化種のセイヨウ～はハチやチョウの助けで花粉をつけてもらわなくても、自分ひとりでタネを作れる性質を持っているのです（単為生殖）。しかも在来種タンポポのタネは秋まで発芽しない性質を持っているのに対し、セイヨウ～のタネは落下した場所ですぐに発芽するので春といわず **1** 年中花を咲かせることができるのです。これでははじめから勝負ありですね。丁度へビー級の猛者とフェザー級のやせのボクシングみたいです。



綿帽子（タネ）（セイヨウタンポポ）

1 個の花で約 **200** 本の綿毛タネとといいます。
1 株に少なくとも **5** 個の花が咲くと仮定して **1** 株で **1000** 個のタネになる。
 発芽から **3** ヶ月で花が咲くというから、全部のタネが発芽すると仮定すると、最初の **1** 粒のタネが **6** ヶ月で **100** 万個のタネになることになる。（「雑草のはなし」田中修、中公）

（食用）

- * 全草食用になります。セイヨウ～でもカントウ～でも食べられる。花も食べられる。少し苦味がある。ヨーロッパでは葉っぱをサラダ菜としてよく食べるそうです。セイヨウ～はもともと食用として北海道の農地で栽培されたとのこと。葉は和え物、酢の物、天ぷら、根はきんぴら、かき揚げなど。タンポポコーヒー

- * というのもあります。根を乾燥して粉にしたものです。私事で恐縮ですが 2 月下旬にワイフと房総にドライブし大多喜町のハーブ園に行ったら“タンポポコーヒー”を売っていたので買って帰り試しました。色はコーヒーにそっくりです。先の“広町そば試食会”の折にも提供したところ美味しいとってくれた方もありましたが、社交辞令を考慮して“まあ、わるくはないが特別どうも!?”といったところですかね。でもハーブティーに違いなく、薬草の本によると胃腸病、便秘、喘息などに良いとかいてあります。私見では結構いけますよ。

(名まえの由来)

- * この植物の英名は **dandelion** すなわちライオンの歯。葉っぱがギザギザ切れ込んでいることからの連想でしょう。タンポポという音はちょっと大和言葉らしくないですね。春の代表的な花にも関わらず、万葉集にも古今集にも枕草子にも源氏物語にもと登場しないそうです。不思議。タンポポの名が出てくるのは江戸時代からといます。名まえの由来は諸説あります。もっとも心引かれ且支持者も多いのは柳田國男の説。古くはこの草をつぼみからの連想なのか「鼓草」(つづみくさ)とっていた記録があり、その鼓の音を擬した“タン、ポンポン”に由来するというものです。事実これに近い“タンタンポポ”“タンポポン”などという方言が各地に残っているそうです。植物名の由来についてはいくつか本も出ています。例えば「植物名の由来」(中村浩、東京書籍)「野草の名前：春、夏、秋編 (山と溪谷社)

(2) カキドオシ (シソ科 多年草つる性)



07年3月 広町 小竹が谷



似ているトキワハゼ

- * 若葉は食用とする。あくを抜いて和え物や浸し物、天ぷら。漢方薬としても使う。小児の疳の虫の薬とされ カントリソウという方言もあるそうです。民間薬として使われてきたことがうかがえます。
- * 田んぼ周りなどに一緒に生えているトキワハゼに花が似ています。こちらはゴマノハグサ科、葉っぱの形がカキドオシと違い、またギザギザもない。名前のおおりに春から秋までずっと花が見られます。

(3) キランソウ (シソ科 多年草)



名前の由来は不詳です。
別名で“地獄の釜の蓋”という変な名前があります。

07年4月 奥竹が谷

- * 漢方では「筋骨草」(きんこつそう) といって全草を解熱、咳止めなどに用いるといます。山菜というより薬草ですね。食べても問題ないでしょうがおそらく美味しくないでしょう。漢方薬の原料を「生薬」(しょうやく) というのはご存知でしょう。動物由来のものや鉱物も使いますが、大部分は植物の部分ですね。例えば生姜(しょうきょう=ショウガ) とか朝鮮人参とか。だから「薬」という字は草かんむりに薬=らくと書きます。

(4) ムラサキケマン (ケシ科、越年草)

- * 越年草または2年草とも言います。秋にタネが発芽して冬を越し、春にいち早く成長し開花します。広町のあちこちでよく見かけます。全草にアルカロイドを含み毒。食不可。中国では殺虫剤に使うといます。



07年4月

広町小竹が谷

(5) キツネノボタン (キンポウゲ科、多年草)

- * 一見 タガラシと似ていますが葉っぱの形が違います。タガラシの上部の葉っぱはもっと細くて光沢があります。有毒・食不可。キンポウゲ科には綺麗な花が多いですが、一般的には有毒で要注意ですね。例えばキンポウゲ、フクジュソウ(福寿草)、トリカブトなど有毒。但し同じキンポウゲ科でもニリンソウのように山菜として利用されるものも在ります。



07年4月

広町小竹が谷

(6) ホウチャクソウ (ユリ科 多年草)



広町 4～5月



広町 秋の実

- * 漢字で宝鐸草。宝鐸とは寺院や五重塔の軒につるす飾りで花の形の連想から。ナルコユリやアマドコロに似ています。食不可。ユリ科の植物は長細い葉っぱに特徴があり清楚でいい花が多いですが食可と食不可とに分かれますね。ヤマユリ、オニユリ、ナルコユリ、アマドコロのように根を食べるものがあり、スズラン、バイケイソウのような有毒なものもあります

(終わり)